

ドイツ・ロマン主義と美的革命の精神

フリードリヒ・シュレーゲルとシラーにおける「分断」と「統合」の問題

中村美智太郎

1 はじめに

本論文は、フリードリヒ・シュレーゲル（一七七一—一八二九）とフリードリヒ・シラー（一七五九—一八〇五）というふたりのフリードリヒの思想を比較し、その共通点と相違点を探ることを通じて、ロマン主義の精神のありようの一端を明らかにすることを試みる。これまで、シュレーゲルとシラーの思想の影響関係を探る際には、シラーの「情感文学」の理論を、シュレーゲルが受容したという観点から論じられがちであった^①。あるいは、両者の関係を、伝記的な事実に基づいて特徴づける

方法によっても論じられがちであった^②。

これらに対して、本論文では、両者を啓蒙主義とロマン主義の接点に位置づけ、シュレーゲルの『ギリシャ文学の研究について』とシラーの『人間の美的教育について』というふたつのテクストを中心に、両者の影響関係を論じる^③。そのための手がかりとして、ドイツにおけるロマン主義を主導したシュレーゲルが、『アテネーウム断章』（一七九八年）のなかで述べた言葉を引用したい。シュレーゲルは、次のように述べている。

フランス革命、フィヒテの知識学、ゲーテの『ヴィルヘル

ム・マイスター』が時代の最大の傾向である。この組み合わせに賛同できない者は、はっきりと物質的に現れた革命しか重要なものと思えない者は、人類の歴史の遙かな高みにまでまだ自己を高めることのできていない者である。[KA, 216]¹⁴⁾

シラーの美的思想との関連を考慮に入れ、シュレーゲルのこの主張における次の二点に着目して、論をすすめたいと考える。すなわち、「革命」の問題と「自己を高める」という二つの問題である。次節以降では、まずシュレーゲルとシラーのおかれていた同時代の状況を歴史的に把握したのちに、この問題について論じよう。

2 分裂の発見と再統一への意志

シュレーゲルの言葉にも「時代の最大の傾向」のひとつと数えられているように、政治的にはフランス革命が一七八九年に起こり、共和制の成立を実現したが、革命戦争の激化とともに、シュレーゲルおよびシラーが美的思索をめぐる論文を執筆している時期には、ジャコバン派独裁下の恐怖政治が出現していた。こうした政治状況に合わせるかのように、思想の領域においても、それまで形成されてきた「統一」が「分裂」へと導かれる

ような事態が起きていた。この事態を把握するために、ペイトの議論を参照しよう。

ペイトは、「統一」と「分裂」をめぐる歴史を次のように整理している¹⁵⁾。ペイトによれば、「理性を行使し、またそれによって経験や古典主義哲学や人文主義的学問全般を適切に活用すること」によって、「人格に調和と風格」がもたらされ、また「判断や目的や行動の基準」が形成され、「これらがともに人間の『本質』を完成させる」という考え方の起源のひとつは、アリストテレスに求めることができる。アリストテレスは、その詩学において、「出来事と結論が一つの全体として一貫性と秩序を持つこと」、すなわち「筋の統一」の重要性を指摘していた。この指摘は、十六世紀のイタリア人によって公式化されるが、ここでは、アリストテレスが「個々の人物の描写よりも筋の構成を重んじた」点に、その重要性がある。つまり、アリストテレスのこの指摘は、「特殊な人物の感情や独自性を通して出来事を見せるよりも、秩序ある一連の行動を媒介として人間を表現すること」に、より力点が置かれており、詩とは、個人的な連想や感情を述べたものとしてではなく、そうした「感情を統制し、そこに完成した範型を与える」ものであると規定することによって、「古典主義の信念の例証」となっている。このことは、根源的な秩序を模倣し、普遍性を具体化しようとする

する試みであると解釈できる点で、まさに倫理的なものであると、ペイトは主張する。

文学理論のなかに位置づけられ得るこのアリストテレスの「統一」という理念を、思想のなかに置き換えてみよう。ペイトはこの普遍性に関する哲学的概念の源をプラトンのみにていない。ペイトによれば、「普遍性の理論の拡大、応用及び矛盾のほぼすべて」が、プラトンによって提起された論題によって方向付けられている。そして、中世を経て、自然の法則を構成する普遍性の法則や秩序は、ヒューマニストの概念のもとでキリスト教的要素と密接に関連していき、ルネサンス・ヒューマニズムにおいては、人間を動物と区別する「唯一の能力」である理性に直観的な確信がもたれていた。ところが、この確信を捨て去ったヨーロッパの哲学は、十八世紀末までに「その全歴史に類を見ないほどの分裂に陥」ってしまい、「いまだにそこから本来には脱しきれずにいる」という。ペイトによれば、プラトンやアリストテレスの理解を超えていたであろう、この「分裂」、すなわち「理性と直観との分離」を、「十七世紀の数学的合理主義が奨励し、ヨーロッパのロマン主義が一般に受け入れることとなった」。

だが、ペイトの言うように、ロマン主義者は、こうした事態をただ「受け入れる」だけだったのだろうか。たとえばこの分裂

から「脱しきれずに」いたとしても、この分裂の存在を発見し、そしてそこから脱しようと試みるのが、ドイツにおける初期ロマン主義の精神のありようとはいえないだろうか。こうした観点から、本節では、シュレーゲルの思想を検討したい。

シュレーゲルは、一七九五年成立の『ギリシャ文学の研究につづいて』(Über das Studium der griechischen Poesie) (以下、『研究』と略記する)⁽⁹⁾のなかで、「美的革命」について語っている。シュレーゲルによれば、同時代の藝術は「新奇なもの、刺激的なもの、目立つもの」ばかりを追求し、藝術理論はそれを肯定している「美的無政府状態 (die ästhetische Anarchie)」[KA2: 224]である。だが、シュレーゲルは「これを「無政府状態」であると批判すると同時に、この状況から新しい領域へと移行する可能性をみており、この移行を「大変動」と名づける。

すでにしばしば差し迫った必要が対象を産み出し、絶望から新しい安息が生まれてきた。無政府状態は良い結果をもたらす革命の母である。現代の美的無政府状態は、同様の幸運な大変動 (glückliche Katastrophe) をみずから期待することが許され得る。[KA1: 224]

近代文学においては、すばらしいと感じる作品が新しく登場する度に、最高の美が達成されたと確信されるが、すぐさまその陶酔は醒め、また「別の偶像を祭壇に据える」[KAI, 219]ことが繰り返されているにすぎず、古代ギリシャにおいて成立していた普遍的な尺度としての「公共的趣味 (öffentlicher Geschmack)」は、もはや共有され得ない。しかし、こうした「無政府状態」というマイナスの事態があるからこそ、むしろ「大変動」が起こり、プラスの事態へと転換する可能性が開かれると、シュレーゲルは主張する。シュレーゲルは、この「大変動」のことを「美的革命」(die ästhetische Revolution) [KAI, 269] と言い換え、近代文学において「よりよき趣味」⁷⁾の復活を実現することで、この「無政府状態」という負の状況を打破するような「美的革命」を期待している。

山本定祐は、ここでシュレーゲルは、近代文学における趣味の没落を嘆いているのであり、美の普遍的な尺度としての趣味の原理自体を否定しているわけではないことを確認し、ギリシヤ文学を支配していた「公共的趣味」を近代文学へと持ち込んだとしても、その前提条件としての「公共的しきたり」を喪失した近代においては、使用不可能であると論じる⁸⁾。しかし、シュレーゲル自身、「現実美的革命の瞬間が近づいている」[KAI, 269]と述べているように、この「近代のカオス」自体

のなかにむしろ新しい可能性を予感しているのであり、山本は、この予感こそがロマン主義文学へとつながるものだと考える。つまり、山本に従えば、ロマン主義者の態度にはただ「分裂」を受け入れるだけでなく、それが実現可能かどうかは別として、「分裂」に抗する姿勢があるといえる。

このように、シュレーゲルにおける古代ギリシヤ文学へのまなざしには、古代ギリシヤの藝術及び社会には存在していた「統一」が失われてしまったという同時代に対する「分裂」の発見が明確に含まれていたといえる。この意味では、ペイトの主張は妥当である。だが、ロマン主義者としてのシュレーゲルが、この「分裂」という事態を受け入れて、古代ギリシヤを憧憬したにすぎなかったとは、とりわけ「大変動」としての「美的革命」を志すような、『研究』における態度をみる限り、少なくとも言えまい。そして、この点において、ペイトの認識をシュレーゲルに当てはめることはできない。

ところで、ペイトのような、古代の「統一」と近代の「分裂」といった定式化とは異なる議論も、近年では重要である。例えば、小田部胤久は、シュレーゲルを「断片作家」とみなし、シュレーゲルが、完全な美によって特徴づけられる古代文学が崩壊し、「断片」と化したところに成立する近代文学の特徴を、すでに古代ギリシヤ文学についても見出していたという点に着

目して論じている^⑤。「完全な有機的組織、全体の生きた統一性の代わりに、取り壊された断片からただ駄作が継ぎ接ぎで作られた」後期ギリシャの詩は、「ただ個々の美しい特徴を有しているにすぎず、完璧で完全な美を含まない」(KA, 284)とシュレーゲルが表現しているように、退廃した近代文学の特徴は、すでに古代ギリシャ文学にも含まれていた。小田部によれば、この部分には「後のシュレーゲルの思想を規定する認識が認められる」。すなわち、『断片』から継ぎ接ぎ細工によって作られた近代の作品のみならず、古代の作品もまた古代世界の崩壊とともに『断片』と化し、ただ『断片』としてのみ近代世界に与えられている、という洞察」を、ここから読み取ることができると考えられるという。小田部のこうした解釈では、統一した古代と分裂した近代という図式では捉えられないシュレーゲルの精神を読み取ることができる。この観点を踏まえると、完全性と断片といった対概念を提出しながら、シュレーゲルは、『断片』のみが存在する近代社会をみることで、同時に、シュレーゲルの理想とする「完全な全体」を、現実には存在しない古代文学のなかに想定しているといえる。

シュレーゲルの「美的革命」は、このように、単なる二元論に解消しえない「現実には存在しない」ものに対するまなざしを確かに含んでいる。では、シュレーゲルは、「現実には存在

しない」場所から、いかにして「美的革命」を実現しようと構想するのだろうか。そして、この「美的革命」という思想を共有したと目されるシラーは、自らの理論のなかで、それをいかにして展開するのだろうか。次節以降では、この問題について考察したい。

3 二つの統合原理

シュレーゲルによれば、美的革命が実現するためには、新しい美学理論が承認され、「真の権威」(KA1, 273)を獲得しなければならぬのだが、では、シュレーゲルにおける「美的革命」は、いかにしてこの「権威」を獲得し、実現されるのだろうか。

シュレーゲルにおいて、美的革命が実現される条件は、大きくわけて二つある。一つは、古代ギリシャと現代(近代)の統合であり、もう一つは、ドイツ人とフランス人との特性上の統合である。

シュレーゲルによれば、古代ギリシャ文学は、「藝術の有機的展開の循環全体」(der ganze Kreislauf der organischen Entwicklung der Kunst) [KA1, 307]とくく完成されており、「趣味と藝術の永遠の自然史」(eine ewige Naughtgeschichte des

Geschmacks und der Kunst) (ibid.) である。そして、この「循環全体」であり「自然史」でもあるギリシャ文学を参照することで承認され、「真の権威」を得るべき新しい美学理論が獲得されるのである。

ところで、シュレーゲルの主張する「有機的展開」は、前節において考察した「大変動」としての「美的革命」を意味しているといえるが、「有機的」という表現は、『研究』の五年前に出版されたカントの『判断力批判』¹⁰⁾を踏まえたものである。

『判断力批判』において、カントは、生物学上の概念であった「有機体」という概念を、哲学のなかへと導入した。この背景には、一七四三年にスイスの博物学者トレンプラーが淡水産ヒドラの再生能力を観察し、この報告が、生物学の領域を超えて、哲学の領域までひろく影響を及ぼす事態に発展したという事実がある。実は十七世紀末から、トカゲの尾や蟹のはさみの再生能力についての報告はあったし、接木についての観察も行われていたのだが、これらの報告を受けて、『判断力批判』のなかで、カントは、こうした動植物の再生能力の例を挙げながら、有機体の概念を社会に適用したのである。カントにおけるこうした適用の例は、例えば、「ある大なる人民を国家へと全面的に改造しようとした最近の企て（引用者註…アメリカ合衆国の独立のことを指すと思われる）に際して、有機的組織（Organ-

sation）という語が、さまざまな行政制度等や国家全体の制度に對して、適切に用いられた。なぜなら、そうした全体（Ganzen）においては、そのすべての構成員は、たんなる手段ではなく、同時に目的でもあるべきであり、彼らがその全体の可能性のために協力することにより、その全体の理念によって、彼らは、それぞれの地位と機能とにしがたって形成されるからである」[KU, B294]とった記述に、典型的にみる事ができる。

渡辺祐邦は、こうした事実が「誇り高いカント解釈の作業においてはつねに無視されている」と指摘し、「カントの真の偉大さは、むしろトカゲやザリガニのような取るに足りない自然物を相手にした同時代の観察の中に重要な哲学的問題が隠されていることを洞察したことにある」と述べているが¹¹⁾、この指摘は、同時代の思想状況にとってきわめて重要なものであり、カントによる「有機体」概念のこうした導入によって、シュレーゲルの「大変動」「美的革命」「展開」といった術語は特徴づけられている点でも無視できない¹²⁾。

また、カントの有機体論においても登場し、またシュレーゲルの『研究』のなかでも主張された、完成された状態を「全体」とみなす態度については、モーリッツの思想との連関が指摘できる。

モーリッツは、シュレーゲルの『研究』に七年先立ち、カントの『判断力批判』に二年先立つ『美しいものの造形的模倣について』¹³（一七八八年）（以下、『造形的模倣論』と略記する）のなかで、「有用でなくともよいものは、必然的にそれ自身のために存立する全体（Ganzes）でなければならないということ」と、そして、美の概念と、それ自身のために存立する全体についての概念は、分ちがたく結合されるということ「[AN, 568]を主張していた。モーリッツは、美しい対象を、それ自身において完成されたものでなければならないものとみなし、藝術作品のような美しいものは、有用性をもたない代わりに、個々の部分が全体と密接に関係していなくてはならないと考え、部分と全体との関係が成立していることを、美という概念の条件とみなす。有用性をもたないこと、換言すれば、「外的な合目的性」が欠如していることは、その対象の内的な合目的性によって、いわば補われなければならない。この意味で、モーリッツの美の規定は、「自立性」（Selbständigkeit）といえるような側面に着目したものであるといえるが、シュレーゲルの古代ギリシャ文学観の根底には、こうしたモーリッツ流の「全体性」への洞察が潜んでいる可能性を指摘できると思われる。

また、シュレーゲルによれば、ドイツ人には、ドイツ人「元来の特性」としての「コミュニケーション能力（Mittelungs-

fähigkeit）の欠如」があるのに対して、フランス人は、「公共的な」という意味で「ギリシャ的な」自らの文学において、「ヨーロッパの他の文明の諸国民より高次の完全性に到達することができ」ため、ドイツ人は、この「コミュニケーション能力」をフランス人から学ばなければならず、それによって「社交性」（Geselligkeit）[KA1, 360]を獲得しなければならない。ここでシュレーゲルは、ドイツ人の作家は、自らの作品で伝えるべき美を神秘的なものとみなすことによって、自らの作品の読者との間に距離を生じさせていると批判しているのだが、いづれにせよ、統合の原理によって「社交性」を獲得すること、で、「完全性」を有する「公共」的世界へと至るという図式を提出している。

このように、いわばヘーゲル的な意味での「止揚する」（aufheben）とも形容できるような二つの統合の原理によって、美的革命は準備され、実現され得る。古代ギリシャと近代を止揚し、さらにドイツ人とフランス人の特質を止揚する「美的革命」以後の可能性を示すものとして、シュレーゲルの念頭にはゲーテがあり、ゲーテを「時代の最大の傾向」のひとつに挙げる根拠はここにあるのだが、シュレーゲルにとって、ゲーテは、「関心と美との中間、技巧（Manieries）と客観（Objektives）

の中間 (Mitte) に」(KAT, 261) 位置する存在である⁽¹⁴⁾。シュレーゲルにとって、この「中間」というあり方は、二つの性質を統合し得る位置を意味している。

だが、シュレーゲルは、この「中間」にヘーゲルのような「絶対者」を想定せず、示唆するのみであり、この示唆するところが、哲学とは異なる「ポエジー」の役割であると考える⁽¹⁵⁾。メニングハウスによれば、このような「中間」には、「二元論の戯れ (Spiel des Dualismus)」があり、この戯れは絶対者を定立するのではなく、この戯れ自体が、「差異化的な戯れ (differenzielles Spiel)」の媒体としての絶対者であると解釈できる⁽¹⁶⁾。この解釈に従えば、シュレーゲルの「中間」とは、二元論を媒介する論理そのものであるとみなすことができるだろう。この意味で、シュレーゲルの理論は、「自己自身の顕在化」とみなすヘーゲルのような絶対者の把握の仕方と区別することができる⁽¹⁷⁾。

このように、シュレーゲルにおけるロマン主義的な精神を統合の原理として捉えられるとすると、この精神は、シラーにおいては、どのように展開されているのだろうか。次節では、この問題について考察したい。

4 道德的存在をめざす精神

第一節で触れたように、シュレーゲルとシラーの直接的な影響関係については、出版時期の観点から推測されていた。特に、シラーの『素朴文学と情感文学について』の出版が一七九五年から一七九六年、シュレーゲルの『研究』が一七九七年という時期に出版されていた事実から、シラーの文学論からシュレーゲルの文学論への影響関係が指摘されていた。しかし、現在では、『研究』の草稿は一七九五年にはおそらく成立していたであろうことが明らかに⁽¹⁸⁾、その可能性は低いと考えられる。

では、シラーからシュレーゲルへの文学論形成上の影響関係は否定されるところでも、前節において確認したシュレーゲルの「美的革命」の精神は、シラーにも共有されていると考えることはできないのだろうか。

結論からいえば、この美的革命の図式を、シュレーゲルによる新しい社会の構想であると考えた場合、シラーの「美的国家」概念との類縁性を指摘することができる。

シラーは、『人間の美的教育について』(一七九五年)(以下、『美的教育書簡』と略記する)⁽¹⁹⁾における最後の書簡、第二七書簡において、次のように述べて、「美的国家」を規定している。

力学的な(dynamisch)法の国では、人間は力として人間と出会い、自分の働きを制限し、——倫理的な(ethisch)義務の国では、人間は法則の威厳によって人間と対立し、自らの意志を束縛するとすれば、美しい社交のサークルにおいて、すなわち美的(ästhetisch)国家において、人間は人間に対して形態(Gestalt)としての現象し、すなわち自由な遊戯の対象としてのみ対立すべきである。[AE27]

シラーはここで、「美的国家」を「美しい社交のサークル」として規定している。つまり、シラーにおける「美的国家」は、「国家(Staat)」という表現から受ける印象とは異なり、政治的な制度としての国家ではなく、「趣味」によって個人の内側に作り出された調和が、社会の内部においてより大きな範囲の調和として実現されることを意味する。シラーにおけるこの術語の成立には、おそらく、シュレーゲルの場合と同様に、小国が分立していたという当時のドイツの情勢が多かれ少なかれ影響していると思われるが、ここで、重要なことは、「力」としての人間や意志の「束縛」といった表現から読み取れるように、みずからの外あるいは内に発見された対立物の、対立しているが故の「分断」を乗り越える枠組みとして、「美的国家」が措定されているということである。そして、この意味で、シュレ

ーゲルの「美的革命」の精神は共有されているといっていよいよだろ。

では、同書簡のなかで「美的仮象の国(Staat des schönen Scheins)」[ibid.]とも表現されるこの「美的国家」に潜む「美的革命」の精神は、シュレーゲルと同一のものなのだろうか。

この点について、シラーの議論を、美的国家を構成する人間規定から再構成しながら、検討しよう。シラーは、「自然は人間を特別扱いしない」という観点から、人間の位置を他の自然物と同等の場にまず置く。この点は、前節で考察したカントによる「有機体」概念の導入の影響下にあると指摘できるところである。シラーは、次のように人間を位置づけている。

人間がまさに人間であるのは、単なる自然がつくってくれたままでのところとどまらずに、自然が人間について予想した歩みを理性によってたどり直し、必然の所産を自らの自由な選択の所産につくり変え、自然的必然性を道徳的必然性にも高めるところにある。[AE3]

シラーにおいて、人間は感覚的なまどろみから覚醒し、自らを人間として自覚し、自らが国家の中にいることを見出さなけ

ればならない。この記述から見てとれるように、シラーの人間観では、「自然的人間」から「道徳的人間」へと移行しなければならない²⁰⁾。しかも、自然的人間は完全に消滅すべき存在ではなく、道徳的國家の形成という過程ではむしろ「自然的社會」として保持されなければならないものである。シラーは、このことを時計の例で説明している。例えば時計職人が時計を修繕するときは、時計の歯車の動きを一度とめるが、國家という「生きた時計」は、それをとめることはできないので、動かしながら修繕しなければならない。この例から、シラーの構想が、自然的狀態から、それを含みながら、道徳的狀態へと移行することだとわかる²¹⁾。

そして、この移行をなすためには、これから目指されるべき道徳的狀態や、そこへと展開されるべき自然國家には依存しない「ひとつの支え」(eine Stütze)を探さなくてはならないとシラーはいう。シラーの目指す社會の變化を可能にする、この「支え」は「第三の性格」(ein dritter Charakter) [ibid.] とも換言されているが、これは、「どちらにも親しくて、単なる(力の)支配から法則 (die Gesezze) の支配への橋渡しをするとともに、道徳的性格の發達を妨げることなく、むしろ目に見えない (unsichtbar) 道徳性 (Sittlichkeit) の感覺的な担保 (Pfand) の役割」[ibid.] を果たすものである。

シラーによれば、民族の中にこの「第三の性格」が優勢を占めるようになってはじめて、道徳的原理に基づいた「國家」をつくるのが可能になる。ここにおいて、シラーは、「第三の支え」による移行を通じて、「個体」(das Individuum) が國家に「なる (werden)」こと・時間の中の人間が理念の中の人間へとみずから「高まる (wachsen)」ことを構想し、その方法は、純粹な人間が經驗的な人間を「抑圧する」(unterdrücken) のでも、また國家が個体を「廢棄する」(aufheben) 方法でもなく、個体が國家になることで、現實的人間が理念的人間へと高まるものだと考えている²²⁾。

本節で再構成してきたシラーの議論を、シュレーゲルの「美的革命」の精神と比較すると、シラーにおける、「第三の支え」によって対立するふたつの要素が止揚という形で統合されるという視点は、シュレーゲルの統合の原理と同構造をなしていることが明らかになる。他方、シラーがシュレーゲルと決定的に異なるのは、統合の原理の先に、道徳的世界を設定している点であり、この意味で、二人の「美的革命」の精神は区別し得る。

5 おわりに

以上、本論文では、シュレーゲルとシラーの思想には、同時代の思想の受容を経て、一定の類縁性があることを示し、シュレーゲルとシラーにおける「美的革命」をめぐる議論を比較検討することを通じて、分裂の自覚と、再統一への意思がロマン主義的精神を成り立たせていたことを確認した。そして、この際に、シラーとシュレーゲルの影響関係を探り、ふたりの構想した「美的革命」の内実を跡づけながら、共有されている姿勢とそうでない点をそれぞれ明らかにすることを試みた。このことは、両者の関係を論じた従来の研究では、十分に明らかでなかった部分である。

最後に、共有されていた「美的革命」という精神を、ロマン主義の精神をめぐる議論との関連から捉えなおし、その意義を確認しておきたい。

シュレーゲルの「断片」の精神に着目する小田部胤久は、「断片」とは一つのジャンルではなく、むしろシュレーゲルの思考活動を突き動かしていた原理で²⁸あって、「ロマン主義美学の本質を解き明かす鍵となるはずのものである」と考え、こ

の「鍵」によって、「ロマン主義美学の近代性」を読み取るこ
とができる²⁹と述べている。この「近代性」とは、本論の議論
に即すならば、分裂を自覚した上で目指される統合の原理とし
ての「美的革命の精神」であり、本論では、シラーからも抽出
できる精神であった。そして、それは定義の難しいロマン主義
の一側面となっているといえる。

また、イエシュケは、ヘーゲルの革命観について言及しなが
ら、たとえ芸術と生との「合一」に関する諸々の前提が幻想であ
ることが明らかになったとしても³⁰、初期ロマン主義における
「美的革命」の目指そうとしたものは、現代においても達成さ
れ得ると指摘している³¹。このようなイエシュケの解釈は、
「美的革命」の理論の意義にとって示唆的であると同時に、ロ
マン主義という運動の射程を現代にまで拡張する可能性³²を指
摘した点で、重視すべきものである。この点からも、本論文で
明らかにしてきたふたりのフリードリヒの思考の営みの痕跡は、
現代の精神的営みにおいても発見し得るものであるといえる。

- (1) この立場に立つ代表的な論文として、次の論文がある。Arthur Lovejoy: *Schiller and the Genesis of German Romanticism*. In: *Essays in the History of Ideas*. Baltimore (Johns Hopkins), 1948, p. 207-227.
- (2) このふたりの人間関係を端的にまとめたものとして、例えば、次の論文がある。高橋義人「ゲーテとロマン主義」、伊坂青司・原田哲史編『ドイツ・ロマン主義研究』、御茶の水書房、二〇〇七年、一二四頁以下。
- (3) 仲正昌樹は、現在のドイツ思想界におけるロマン主義に対する理論的態度を、大きく分けて三つに分類している。仲正によれば、①ヘーゲルの近代（モデルネ）の理性に常に随伴してきた理性へのアンチテーゼとみなす合理主義的立場（ハーバマス）、②ヘーゲルの「歴史哲学」的枠組みを理論的に越えて、ポストモダンの美学に直結するとみなす非合理主義的立場（ホーラー）、③カントからヘーゲルに至るドイツ観念論の内部での美の理論と初期ロマン派のそれを整合的に論じ、モデルネからポストモデルネへの移行をスムーズに行おうとする中間的立場（フランク）に分類することができる。本論文で展開されるシュレーゲルとシラーをめぐる議論の枠組みは、この分類では①および③に相当する。仲正の枠組みについては、次を参照のこと。仲正昌樹『モデルネの葛藤 ドイツ・ロマン派の《花粉》からデリダの《散種》へ』、御茶の水書房、二〇〇一年、五頁以下。
- (4) 本論文におけるシュレーゲルの作品からの引用は、すべて次に換えて。Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe. Hrsg. v. Ernst Behler unter Mitwirkung von Jean-Jacques Anstett und Hans Eichner. Paderborn/München/Wien (Thomas Schöningh), 1968. 以下「引用に際してはKA」と略記し、略号の後はは巻数・頁数を順に示す。訳出に際しては、次の邦訳を参照した。山本定祐編訳『ロマン派文学論』、富山房百科文庫、一九七八年。ウォルター・ジャクソン・ペイト『古典主義からロマン主義へ十八世紀英国の文学的風土』みすず書房、一九九三年、十八頁以下。以下の「統一」をめぐる歴史については、ペイトの「古典主義および新古典主義の前提」にかかわる議論を参考にまとめた。
- (5) 『研究』は、一七九五年に成立し、一七九七年に『ギリシャ人とローマ人、古典古代についての歴史的批判的試論』(Die Griechen und Römer. Historische und kritische Versuche über das klassische Altertum)の一部として出版されよう。出版される際に、シュレーゲルは、序文を付け加えている。なお、「趣味」概念については、もちろんカントも言及しているが、ヴィンケルマンの『ギリシャ芸術模倣論』の冒頭が古代ギリシャと関連づけられた「よき趣味」についての表現で始まっていることは、本論にとって示唆的である。この問題については、次を参照。山本定祐『ドイツ・ロマン主義とその時代』、伊坂青司・森淑仁編『シェリングとドイツ・ロマン主義』、晃洋書房、一九九七年。なお、シラーと同時代の趣味概念との関係については、次を参照。Wilhelm Amann: Die stille Arbeit des Geschmacks. Die Kategorie des Geschmacks in der Ästhetik Schillers und in den Debatten der Aufklärung. Würzburg
- (6) 「研究」は、一七九五年に成立し、一七九七年に『ギリシャ人とローマ人、古典古代についての歴史的批判的試論』(Die Griechen und Römer. Historische und kritische Versuche über das klassische Altertum)の一部として出版されよう。出版される際に、シュレーゲルは、序文を付け加えている。なお、「趣味」概念については、もちろんカントも言及しているが、ヴィンケルマンの『ギリシャ芸術模倣論』の冒頭が古代ギリシャと関連づけられた「よき趣味」についての表現で始まっていることは、本論にとって示唆的である。この問題については、次を参照。山本定祐『ドイツ・ロマン主義とその時代』、伊坂青司・森淑仁編『シェリングとドイツ・ロマン主義』、晃洋書房、一九九七年。なお、シラーと同時代の趣味概念との関係については、次を参照。Wilhelm Amann: Die stille Arbeit des Geschmacks. Die Kategorie des Geschmacks in der Ästhetik Schillers und in den Debatten der Aufklärung. Würzburg
- (7) 「研究」は、一七九五年に成立し、一七九七年に『ギリシャ人とローマ人、古典古代についての歴史的批判的試論』(Die Griechen und Römer. Historische und kritische Versuche über das klassische Altertum)の一部として出版されよう。出版される際に、シュレーゲルは、序文を付け加えている。なお、「趣味」概念については、もちろんカントも言及しているが、ヴィンケルマンの『ギリシャ芸術模倣論』の冒頭が古代ギリシャと関連づけられた「よき趣味」についての表現で始まっていることは、本論にとって示唆的である。この問題については、次を参照。山本定祐『ドイツ・ロマン主義とその時代』、伊坂青司・森淑仁編『シェリングとドイツ・ロマン主義』、晃洋書房、一九九七年。なお、シラーと同時代の趣味概念との関係については、次を参照。Wilhelm Amann: Die stille Arbeit des Geschmacks. Die Kategorie des Geschmacks in der Ästhetik Schillers und in den Debatten der Aufklärung. Würzburg

- (Königshausen und Neumann), 1999.
- (8) 山本定祐「前掲書（一九九七年）」。
- (9) 小田部胤久「フリードリヒ・シュレーゲルと『断片』の精神——ロマン主義の美学への一つの断章」、『美学』第五七卷一号（二二五号）二〇〇六年、美術出版社、十五頁以下。
- (10) 作品からの引用は次に拠る。Immanuel Kant: Kritik der Urteilskraft. Hsg. von Gehard Lehmann. Stuttgart (Reclam) 1976. 以下の引用では「KU」と略記し、略号の後に頁数を示す。日本語訳は以下を参考に、適宜変更を加えて用いた。原佑訳「判断力批判」『カント全集第八巻』理想社、一九六五年。
- (11) 渡辺祐邦「自然哲学にとって十八世紀とは何であったか」伊坂他編『ドイツ観念論と自然哲学』創風社、一九九四年、一四八頁以下。
- (12) 有機体概念の歴史については、以下を参照。加藤尚武「有機体の概念史」、『シェリング年報第十一号』、晃洋書房、二〇〇三年。
- (13) 作品からの引用は次に拠る。Karl Philipp Moritz: Über die bildende Nachahmung des Schönen. In: Werke Bd.2. Hsg. von Horst Günther. Frankfurt am Main (Umsel) 1981. 以下の引用では「MN」と略記し、略号の後に頁数を示す。
- (14) 「中間」(Mitte) を重視する態度は、カントにも見られる。『美と崇高との感情性に関する觀察』（一七六四）のなかで、カントは「崇高も美も「中庸」(Mittelmaß)」を越えた場合「退化したものとみなす姿勢を示している。カントの議論にうづばれ、次を参照。Immanuel Kant: Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen. in: Immanuel Kant Werkausgabe Band 2 Vorläufige Schriften bis 1768 (2). Hsg. von

- Wilhelm Weischedel. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1977.
- (15) メリタム・ハムは、シュレーゲルの「ネーション」における神秘的な性質を否定し、それを哲学的な概念として取り扱っている。Winfred Menninghaus: Unendliche Verdoelung. Die frühromantische Grundlegung der Kunsttheorie im Begriff absoluter Selbstreflexion. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1987, S. 53.
- (16) aa. O. S. 57. なお、メリタム・ハムの解釈は、反省概念に着目しつつ初期ロマン派を論じたメンヤッソンの議論を大膽にしている。Vgl. Walter Benjamin: Der Begriff der Kunstkritik in der deutschen Romantik. In: Walter Benjamin Gesammelte Schriften Bd.1. Frankfurt am main (Suhrkamp) 1991.
- (17) シュレーゲルとメーナーの区別に関する議論は、以下を参照。Elizabeth Millan-Zabert: Friedrich Schlegel and the emergence of romantic philosophy. Albany (State University of New York Press) 2007, p. 44f. 各巻の序文に「四」の数字が置かれ、その数字は「五」を参照。G.W.F.Hegel: Wissenschaft der Logik 2. In: G.W.F.Hegel Werke Bd.6. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1986, S.200.
- (18) Vgl. Hans Eichner: The Supposed influence of Schiller's Über naive und sentimentalische Dichtung on F.Schlegel's Über das Studium der griechischen Poesie. In: The Germanic Review. Vol. 30. 1955. p.p. 260-264.
- (19) 作品からの引用は、以下を参照。Friedrich Schiller: Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen. In: Schillers Werke. Nationalausgabe Bd. 20. Hsg. von Benno von Wiese. Weimar (Bohlan) 1962. 以下、同様に

際してはAEと略記し、略号の後に書簡番号を順に示すこととする。

- (20) これはカントの人間観に近い。例えば、崇高を論じた『判断力批判』の該当箇所、とりわけ「自然における力学的崇高について」[KU: 102]を参照のこと。

- (21) この「移行」が結局は失敗に終わったとする見方もある。これについては、次を参照のこと。Linda M. Brooks: *The Menace of the sublime to the individual self in Kant, Schiller, and Coleridge. The disintegration of identity in romanticism*. New York (The Edwin Mellen Press) 1995, p.79f.

- (22) ここで「廃棄すること」と「高まること」とはシラーによって区別されていることを考慮し、この場合の「aufheben」は、

ヘーゲルの意味での「止揚する」ではなくて、「廃棄する」と読まれるべきである。

- (23) 小田部胤久・前掲書(二〇〇六年)、同頁。

- (24) ヴァルター・イェシュケ「美的な革命——導入のためのキーワード」秋庭史典訳、『初期観念論と初期ロマン主義——美学の諸原理をめぐる論争(1975-1985)』昭和堂、一九九四年。

- (25) ドイツにおけるロマン主義を再評価する傾向としては、ボーラー(Karl Heinz Bohrer)やミンツハウス(Winfried Menninghaus)らがいる。彼らは「初期ロマン主義にポストモダン性を発見し、フランスのいわゆる脱構築理論との類似を指摘している。この問題については、本論文の範囲を逸脱しているので、稿を改めて検討する必要があるだろう。

(なかむら みちたろう／博士後期課程)